

+

【出題の意図】 課題文は詩人／文芸評論家の若松英輔による『14歳からの教室』（NHK出版、二〇二〇年）の「分からないけれど分かる」と題された一節であり、小林秀雄や九鬼周造の評論及び『古今和歌集』の和歌、詩人である著者自身のつくった現代詩などを引き合いに出しながら、言語文化とその理解に関して論じた内容である。この文章を読んで、二つの課題を課している。問1は、小論文論述の前提となる問題把握力・要約力を見る問いであり、問2は、小論文の論述を展開し、表現する力を見る問いである。

【解答例・評価基準】

問1 解答例

歌人が雨に向かってそんなにひどく降らないでくれと呼びかけた歌というだけでなく、桜の花の散りゆく情景のなかにいるはずの詠歌主体に自らを重ねながら、眼前の桜花を「まだ」見ていない人への思いをとらえようとしている。九鬼周造の『惜し』は『愛し』にほかならない」という説をふまえながら、歌人が雨に打たれる桜花の前に、「まだ見ぬ人」に抱いてきた「やるせない思い」を募らせていることを読み取っている。

(194字)

問2 評価基準

(話題に関して)

・「伝統」と「ことば」に関連する話題が取り上げられているか。

(展開に関して)

・文章構成が明確になっているか。

・「伝統とことば」というテーマに即した、筆者としての問題提起とそれに応じた結論が示されているか。

(主張について)

・「伝統とことば」に関する、論者としての独自の主張がなされているか。

(用語等について)

・小論文を論述するのに適切な言葉を選んでいるか。

・表記や語彙・語句、文章の言い回しに不明確なところ・不正確なところや、誤用はないか。